



イギリスの民事裁判と和解



【カーディフの町並み(後方は市役所)】

裁判は公開なので、誰でも傍聴できます。それはここイギリスも同じです。映画「ブリジット・ジョーンズの日記」にも登場する王立裁判所は、見事なゴシック建築で有名な観光スポットですが、最近はその荘厳な外観だけでなく、中へ入って裁判傍聴まで楽しむという通な観光客も増えているそうです。

とはいえ、民事裁判に限っていえば、傍聴できる事件は日本ほど多くないかもしれません。イギリスの民事裁判のうち、公開の弁論 (hearing) に至るのはわずか3～4%といわれ、ほとんどの事件は非公開の準備手続 (Case Management Conference) で和解 (当事者の合意) 等によって終了してしまうからです。

私は、昨年7月までの1年間、カーディフ大学ロースクールで司法制度等の調査研究に当たりました。カーディフは、イギリス・ウェールズの首都で、城塞を中心とする歴史ある建造物と、巨大スタジアムや大型商業施設などの新しい建物とが見事に調和した美しい街です。裁判所をはじめ司法機関も多数置かれているので、大学での調査研究の傍ら、裁判実務を直接見分する機会にも恵まれました。



【カーディフ大学 (メインビルディング)】

特に、先に述べた非公開の準備手続では、和解成立の瞬間に多く立ち会うことができました。合意によって紛争を終了させる和解は、一般に最も優れた紛争解決方法といわれます。のみならず、和解はイギリスの民事裁判における解決の大半を占めており、和解を知らずして民事裁判を語ることはできません。そこで、今回は郡裁判所で行われた医療裁判をもとに、その一端をご紹介させていただこうと思います。



午前9時きっかりに、判事室の卓上電話が鳴り出します。担当判事がスピーカーホンのボタンを押すと、原告側・被告側の各弁護士の事務所と回線が繋がり、同時に録音機の電源が入って、デジタル時計が時を刻み始めます。

挨拶の後、事前にEメールで提出されていた書面をもとに準備手続が始まります。



【郡裁判所 (county court) が入る
カーディフ民事裁判センター入口】

今回の事件は、産科医の不適切な処置によって新生児に重い脳障害が生じたとして、両親ら（原告）が病院（被告）を訴えたものでした。被告側は当初、「適切な処置を施しても脳障害の発生を防ぐことはできなかった」と主張して因果関係を争いました。

第1回期日で、原告側・被告側それぞれの鑑定医から、相矛盾する2通の鑑定書が提出されたため、判事は、双方の鑑定医で議論して共同意見書 (joint memo) を作成するよう指示しました。これを受けて、両鑑定医が議論した結果、原告の主張どおり、不適切な処置と脳障害との間に因果関係があるという統一見解に至り、その旨の共同意見書が提出されました。

今回の期日では、被告から、この共同意見書の結論を踏まえ、原告に謝罪した上で一時金と毎年の治療費を支払いたいとの提案があり、原告がこれを受け入れると述べました。ちなみに、合理的な和解提案を拒絶した場合、それ以降の訴訟費用はすべて拒絶した人の負担となりますから、提案を受けた側も安易に拒絶することはできません。判事がその場で合意内容を文書にまとめてサインし、これで法的に和解成立となります。

私が最も驚いたのは、見解の異なる鑑定医同士が議論することで統一見解を出すという手続でした。制度的背景が異なるため直ちに我が国で取り入れることは難しいのですが、早期の紛争解決にとって大変有意義な手続だと思います。

また、準備書面が判事のパソコンにEメールで直接提出され、書記官や廷吏はもちろん双方の弁護士さえ現実には一度も出頭しないまま、判事の個室内で和解成立までの全プロセスが完結していたことも強く印象に残りました。

このような手続の工夫と合理化が、冒頭に述べた高い和解率を支えています。



イギリスの裁判官の和解に対する思いは、担当判事の次の言葉によく表れています。

「我々が出す判決は昨日の争いを解決するかもしれない。しかし、争っている人々が自分で見つけた答えならば、それは明日へ踏み出す第一歩となり得る。」



【カーディフ大学の研究者らと】

(鹿児島家庭裁判所鹿屋支部判事 廣瀬 達人)